

木島：はい。どうもありがとうございました。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：それでは時間となりましたので。どうもニキ先生、ありがとうございました。それでは第4報告になりますが、愛知大学の東亜同文書院大学記念センターの武井義和さんのご報告をお願いしたいと思います。最初にちょっと武井さんの略歴をご紹介します。1995年に愛知大学文学部の史学科を卒業されまして、2006年愛知大学大学院博士後期課程を終了されて、博士（中国研究）の学位を習得されています。2006年から現在まで継続していますが、東亜同文書院大学記念センターのポストドクターの職を務められています。主な著作として、まず博士の学位論文として「上海における朝鮮人社会の歴史的考察 1910年から45年」という、ご存知のように朝鮮人は戦前の場合は大日本帝国に所属している日本人でしたので、それが上海にいた場合にどうなるかという大変面白い問題を取り扱っておられます。それから愛知大学の東亜同文書院記念センターオープンリサーチセンターの1号に載っていますが、「東亜同文書院に関する先行研究の回顧と今後の展望」という研究史の整理をされています。同じように研究史の整理で「中国における東亜同文書院研究」、こちらの場合は中国のほうですが、これは愛知大学の国際問題研究所の132号に載っています。以上のように、特に愛知大学の東亜同文書院記念センターに所属して、東亜同文書院大学の研究では若手の注目株ということになるかと思います。それでは今日のご報告の内容は「第2次大戦後の欧米における東亜同文書院研究」ということです。よろしくお願いします。

武井義和（愛知大学東亜同文書院大学記念センター）：ただいまご紹介にあずかりました武井義和でございます。よろしくお願いします。私の報告の課題は第2次大戦後の欧米での東亜同文書院に

関する先行研究の整理を行うものですが、その作業を通じて、どのように同文書院を論じてきたのかという点をおおまかながら述べていきたいと思っています。その上で、東亜同文書院を日中両国だけでなく、欧米も関連させてより一層国際的な広がりをもつ研究へと発展させるための分析視覚について自分なりの見解を出してみたいと思います。言語問題の関係上、アメリカにおける先行研究の整理が中心となりますので、この点ご了承下さい。

さて、私のテーマは「第2次大戦後の欧米における東亜同文書院研究」ですが、最初にお断りしておかなくてはならないことがございます。タイトルに欧米という言葉がついていますので、本当でしたらヨーロッパとアメリカの研究動向を取り上げなくてはなりません。しかし、私が理解できる言語の関係上、また、先行研究を調査して本日まで得られた文献の関係上、アメリカで発表された研究を主に取り上げることになりますので、その点をご了承ください。なお、英語の論文や図書をいくつかご紹介しますが、その日本語訳についてはこちらのレジメをご覧ください。

私は今までに日本と中国で発表された東亜同文書院に関する研究の整理を行ってきましたが、欧米における研究の整理は初めての試みでした。このシンポジウムを迎える前の時間的余裕が必ずしも十分とは言えない状況の中で調査を進めてまいりましたが、端的に言いまして、日中両国に比べて東亜同文書院を扱った研究は非常に少ないです。もっとも、私は今回東亜同文書院に限定して調査を行いましたので、もう少し裾野を広げて、たとえば中国近現代史、日本近現代史という幅広い観点から見れば、わずかながらでも東亜同文書院が関連的に取り上げられている研究もより多く見い出せたかもしれません。

最初にこの点に関して二つほど事例を挙げた

いと思います。一つは今から10年あまり前になりますが、1998年に「Wartime Shanghai」という本がロンドンと北米で出版されました。日本語に直しますと戦時期の上海となりますが、1937年から1946年までの、文字通り戦時期から戦争直後にかけての上海の政治的社会的状況を複数の研究者が論じている研究書です。この中に当時カリフォルニア大学教授でいらしたジョシュア・フォーゲル氏が「The Other Japanese Community: Leftwing Japanese Activities in Wartime Shanghai」、日本語では「もう一つの日本人社会 戦時期の上海に置ける日本人左翼の活動」という訳になりますが、その中で1ページだけですが、東亜同文書院にふれています。1920年代から1930年代における書院での左翼活動、その果たした役割について概説的に述べています。

二つ目はサーラ・スヴェンというドイツ人研究書で現在上智大学準教授でいらっしゃるが、東京にあるドイツ日本研究所に勤務していた2002年に「Pan-Asianism in Meiji and Taishō Japan – A Preliminary Framework」という明治、大正期における日本の汎アジア主義についての論文を記しています。これは近代日本の思想について論じた研究ですが、この研究の中で東亜同文書院の経営母体でありました東亜同文会を事例的に挙げるとともに、東亜同文会による東亜同文書院の設立についても日本の研究を参考にしながら言及されています。ちなみにサーラ・スヴェン氏は昨年11月に東亜同文書院大学記念センターが主催した公開講演会で講師としてお招きしたことがあります。

以上、お話ししたのはごくわずかな例ですが、東亜同文書院や東亜同文会を中国近現代史や日本近代史について考察するための方法として取り上げている様子がそこから浮かび上がります。いわば歴史を考察するための手段としての東亜同文書

院という位置づけがなされているかと思います。

一方、それに対して繰り返しになりますが、東亜同文書院そのものを扱った研究は非常に少ないのです。その中で第一人者として挙げられるのは本日講演者のお一人としてアメリカからお越しのダグラス・レイノルズ先生です。レイノルズ先生は日本と中国の近現代史がご専門で、1970年代後半に数年日本に留学されたことがきっかけで東亜同文書院研究に携わるようになったと承知しておりますが、検索の結果探し出すことができた先生の主なご研究を列挙しますと、The Journal of Asian studies という学術雑誌の1986年11月号に掲載されました「Chinese Area Studies in Prewar China: Japan's Tō-A Dōbun Shoin in Shanghai, 1900-1945,」という論文、1989年にプリンストン大学から出版された「The Japanese Informal Empire in China, 1895-1937」という研究書に所収のご論文「Training Young China Hands: Tō-A Dōbun Shoin and Its Precursors, 1886-1945,」、2001年に初版としてミシガン大学出版から出版された「Education, Culture, and Identity in Twentieth-Century China」という研究書に所収の「Christian Mission Schools and Japan's Tō-A Dōbun Shoin」が挙げられます。

またその間、1998年にピーター・ドウス氏と小林英夫氏が編著となって出版された「帝国という幻想」という研究書の中にレイノルズ氏のご論文が「東亜同文書院とキリスト教ミッションスクール」という題名で日本語訳になって掲載されています。発表時間が限られていまして、これらすべてのご研究を詳細に紹介する余裕がありませんので、かいつまんで述べていきます。

まず、1986年のご論文「Chinese area studies in Prewar China: Japan's TōA Dōbun Shoin in Shanghai, 1900-1945,」、これは日本語に訳します

と「戦前中国における地域研究、1900年から1945年、上海における日本の東亜同文書院」という訳になりますが、第二次世界大戦後にアメリカで発達した地域研究が、それより以前に東亜同文書院で実践されていたことに関心をもたれ、東亜同文書院大学史、そして「滬友（コユウ）」という同窓会雑誌、また東亜同文会が発行していた雑誌「支那」をはじめ、様々な資料を駆使して東亜同文書院の成立から教育内容、そして卒業を翌年に控えた学生たちが学業の集大成として毎年行っていた調査大旅行について詳細に調べ、同文書院の教育を地域研究の観点から評価されているものであると私は理解しています。実はこのご論文は洋の東西を問わず、東亜同文書院研究において画期的な意味をもつと私は考えています。なぜなら、中国はもちろん、日本に先駆けて同文書院の特徴を浮き彫りにした研究と言えるからです。この点を明らかにするために、ここで少し日本の状況についてふれておきたいと思います。

1965年に竹内好によって発表された論文が我が国で戦後初めて発表されたものでしたが、冷戦が終結した1980年代末から90年代初めに至るまで、東亜同文書院研究は多くありませんでした。もちろん実証的に研究がなされたものもありますが、全体的な傾向としては書院の実態を解明するよりも、戦前の日中関係史の中で同文書院を否定的に捉える研究が中心でした。したがって、調査大旅行で得られた研究成果などもそのような位置づけがなされていました。藤田佳久東亜同文書院大学記念センター長は、この調査大旅行の研究成果の価値の高さに着目しまして、1987年から調査大旅行についての研究を継続してきましたが、藤田センター長の言葉を借りれば、ベルリンの壁が崩壊するまであまり注目されてこなかったという状況がありました。日本で一気に研究が進展するのは1990年代に入ってからです。それ以降現在まで研究者が個人の問題意識に基づいて、そして資料を

ベースとして同文書院の実態を解明しようという傾向になってきています。

これは一見すると研究の分散化、個別化という傾向が否めませんが、いずれにしても日本でまだ書院研究があまり進展していなかった時期にレイノルズ先生がこのような研究をアメリカで発表されたということは、世界的規模で見れば書院研究は日本に先んじてアメリカで最初に実態が掘り下げられ、評価を与えられたということが出来ます。なお「Training Young China Hands: Tō-A Dōbun Shoin and Its Precursors, 1886-1945」、文字通りに日本語に訳せば、「若い中国の官吏を教育すること、東亜同文書院とその先駆者たち 1886年から1945年まで」となるかと思いますが、ここでは戦前日本の帝国主義の中国における発展を時期区分しまして、その歴史的流れの中に東亜同文書院の変遷を位置づけ、それぞれの時期における東亜同文書院の特徴について論じています。

ところで、先ほど紹介した1998年に発行された「帝国という幻想」という本は、東亜同文書院研究にとっては画期的でした。なぜなら、レイノルズ先生のご論文「東亜同文書院とキリスト教ミッションスクール」と栗田尚弥先生のご論文「引き裂かれたアイデンティティ」がともに収録され、同書においてお二人の東亜同文書院について相対する見解が同時に示されたからです。レイノルズ先生は文化侵略の問題を通じて、ミッションスクールやキリスト教系教育機関と東亜同文書院を国際的・比較的視点から論ずることを目的とされましたが、これら各種の学校の近代中国における誕生から1945年、または1949年までの考察を通じて、次のように結論づけられています。

つまり、1949年の中華人民共和国成立で消滅したものであった中国でのキリスト教が、改革開放後の1980年代、1990年代に復活し、信者が

激増した事実にあふれ、その背景としてかつてのミッションスクールは多くの中国人にあふれ、その生活を変えるとともに、学校運営も中国人教師や指導者に頼り、中国人の中国人による中国人のための教育という目標に忠実だったと。そのために外国人宣教師が去った後も彼らの遺産は中国の教員や生徒、教会員の信仰の中に残ったからであると述べています。

そうしたミッションスクールなどのキリスト教系の学校が1920年代から1940年代にかけて次第に中国化していったのに対しまして、東亜同文書院は中国から見ていっそうの外国化、それは日本化と換言できますが、そのような傾向を強め、教育も、日本人の、日本人による、日本人のためのものだったために、中国には中国人が懐かしむような遺産をほとんど残すことがなく、したがって第二次世界大戦による日本の敗北とともに消滅した旨述べています。

一方、栗田先生は近代日中関係史における東亜同文書院について、精神史的観点から分析し、日中戦争期に自己のアイデンティティを喪失させられていく中で苦悩する東亜同文書院の姿を明らかにされましたが、同時にレイノルズ先生とは逆の観点から同文書院の位置づけをされています。つまり、東亜同文書院は日清提携を基盤としたビジネススクールだったのであり、ミッションスクールのような中国人の精神を作り変えるような使命感を持った学校とは異なる、と述べられています。また、去年同じこの場所で開催されたシンポジウムでも、東亜同文書院とミッションスクールは同列に論じられないとコメントされました。

このようにお二人の見解は真っ向からぶつかっているのですが、東亜同文書院についてそのような見解を導き出す研究が同時に1冊の図書の中で、しかも出身国が異なる研究者の論文が収録

された図書は、私が知る限りこれが最初です。しかし、今述べたような意見のぶつかり合いは、見方を変えれば同文書院に関する日本と西洋の研究の、ある種の交流とも言えるわけでして、そうした意味でこの書物は大きな意味をもっていると考えています。

最後に、以上の先行研究の回顧を踏まえた上で、より国際的な視野を含めた今後の東亜同文書院、東亜同文会の研究の視覚について、試論という形で述べてみたいと思います。東亜同文書院と言いますと、日本人ならば日中関係という枠組をすぐに想像するのですが、今回のシンポジウムのテーマのような視点で考える場合、20世紀前半期における東亜同文会や東亜同文書院を通じてみた日本と欧米の相互認識という問題が設定できるかと思います。具体的には、東亜同文書院、または東亜同文会が欧米をどのように認識していたか、一方で欧米は東亜同文書院や東亜同文会をどのように認識していたかという問題であり、それは中国を媒介としての相互認識という形で捉えられるものではないかと思います。

具体的に言いますと、東亜同文会は1898年に支那の保全などを綱領として誕生した団体です。当時は欧米列強によって中国分割が進行していた時期でした。それに反対するような主張を東亜同文会は示したわけです。それは欧米列強への対抗という意識でした。したがって日清提携、今風に平たく言えば日中友好となるのでしょうか、東亜同文書院はそうした理想を教育面で実現するために、東亜同文会によって開設された学校です。そうした日清提携の先に意識されていたものは欧米列強の存在でした。また、東亜同文書院の初代、そして第3代院長、そして東亜同文会の幹事長を務めた根津一も1910年代、儒教の国である中国にアメリカがキリスト教布教などの形で進出したことに警戒感を抱いていたことが、すでに栗田先生

によって明らかにされています。この支那の保全という東亜同文会の主張は、東アジア政治情勢、ひいては日本の独立という政治的危機感から、根津によるアメリカへの警戒感は思想的危機感からという違いがありますが、いずれにしても様々な次元で中国における欧米の存在に注意が払われていたということがわかります。

しかし一方で、西洋人も東亜同文書院や東亜同文会の教育活動について、自国の中国における権益の問題と関連づけて、やはり警戒感をもっていました。それはイギリス人とドイツ人の記録からも伺い知ることができます。1982年に出版された「東亜同文書院大学史」には、1906年に同文書院を視察に訪れたイギリス陸軍軍人カートン大尉が「上海サタデー・レビュー」紙に発表したという長文が掲載されています。長いのでポイントのみを述べますと、東亜同文書院の目的は日本が中国で勢力を伸ばすために必要な諸般のことを教えることにあった、そして中国人に扮して中国の辺境まで出かけて白昼堂々と闊歩し、自国に必要な情報を収集して回るのである、と紹介しています。当時イギリスは上海を中心とする長江流域などを勢力範囲としていたので、そうした自国の権益をいかに擁護するか、またはイギリスが中国でいかに経済的に発展していくかを考えたときに、同文書院がある種のライバルとして認識されていた様子が浮かび上がります。

また、1907年6月に発行された第91回「東亜同文会報告」には、上海ドイツ領事館から本国政府へ行ったとされる秘密報告の日本語訳が掲載されています。そのような秘密報告を東亜同文会はどうして、どのようにキャッチしたのかという疑問があるのですが、教育について興味深い記述がありますので、紹介します。要約すると次のようになります。日本の商工業がいかに発展しようともドイツの敵ではないが、注目すべきは日本の対清

政策教育政策である。第一に教育政策に至っては清国の留学生を本国に誘致して日本的に教習し、第二に上海に東亜同文書院を設けて盛んに本国学生を清国的に教習しつつある。今後、この二者の上に日本によって行われる政治上・経済上の対清政策は恐るべきものがある。

この第一で述べられている、清国の留学生を本国に誘致して日本的に教習し、というのは、東亜同文会が清国留学生を教育するために東京に設立した東京同文書院のことです。この学校は1899年に設立され、中国ナショナリズムの高まりの影響を受けて入学者数が減少した1922年に廃校となるまでの間存続しました。ここからはドイツが日本の、具体的には東亜同文会の教育活動に危機感を抱いていた様子がわかります。つまり、イギリスやドイツなどの西洋諸国は、中国における自国の発展について考えた際に、同文書院に対して、特にその教育方法に脅威を感じていたことが、断片的ですがこれらの資料から浮かび上がってきます。ここで紹介したのは1900年代半ばの2点の資料ですが、この問題を深く掘り下げていくには、言うまでもなくそれ以後の時期に関する資料を調査・収集していく必要があります。また、資料や文献を読みこなしていくために、英語のみならずドイツ語やフランス語の語学力が要求されるなどの、容易に超えがたい語学の壁もあります。しかし、いずれにしましても、当時の中国をめぐる国際関係の中に東亜同文書院や東亜同文会を位置づけ、日本と欧米の相互認識の焦点として捉えることが今後可能性として考えられるテーマではないかと私は考えています。

本日の報告では紹介できない研究もままございました。そうした課題については、今後論文としてまとめるなどの形で補っていきたいと考えています。以上をもちまして私の発表を終わらせていただきます。皆様、ご清聴ありがとうございます。

た。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：どうも武井さん、ありがとうございます。ただ今のご報告は特に欧米といってもアメリカの研究、とりわけレイノルズ先生の研究を中心にお話があったと思います。また、日本で出された「帝国という幻想」の中での栗田先生とレイノルズ先生の若干の意見の違いについては、この後栗田先生のコメントの中でもまたご指摘があるかと思います。それで最後に武井さんから、今までの日中関係という中で東亜同文書院を位置づけるのではなくて、東亜同文書院が、あるいは東亜同文会と言ってもいいかもしれませんが、日中提携による支那の保全という目的を掲げたときに、当然欧米の中国に対する侵略ということがあるわけで、それを前提にしているわけだから、これからは今日のシンポジウムをふまえて、日本と欧米の相互認識の焦点として東亜同文書院を考えるという視点が必要ではないかというご指摘だったと思います。時間がだいおおしていますので、質問は後でまとめて、最後のコメントの後の中に入れていただきます。武井さん、どうもありがとうございます。

引き続き栗田先生にお願いしたいと思いますが、簡単に栗田先生の紹介をさせていただきます。栗田先生は1977年に中央大学法学部をご卒業され、1988年明治大学大学院政治経済学研究科政治学専攻博士後期課程単位習得されて退学されています。現在は国学院大学文学部の講師をお務めになりながら、中央大学社会科学研究所客員研究員をされています。専攻としては日本政治外交史、及び日本政治思想史をおやりになっていまして、著書としてはなんといっても新人物往来社から出ています「上海東亜同文書院」が、これが今までの同文書院の評価を変えた、そういう意味では画期的な著作だと考えられます。そのほか多数のご

著書及び論文がございますが、今日は時間の関係で省略させていただきます。それでは栗田先生にコメントをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

栗田尚弥（国学院大学）：栗田です、よろしくお願いします。アメリカとフランスを代表される近代史の研究者、それからアメリカを代表されるライブラリアン、愛知大学が誇る若手研究者のご報告に対して私ごときがコメントを加えられるかどうかということがございますが、藤田先生のほうからやれ、と言われましたので、恥ずかしながらやらさせていただきます。ある程度のストーリーはお手元にあるペーパーに書いてありますが、急いで作ったもので、打ち間違い等が少しありますので、ご容赦願いたいと思います。

まず、このシンポジウムは3回目になりますが、最近非常に東亜同文書院に関する研究、報告が増えているようです。この愛知大学の図書館の成瀬先生によりますと、お作りになった目録等は同文書院関係目録を参考にさせていただきますと、戦前から1988年に東亜同文会の後進とも言うべき霞山会が東亜同文会誌を作った、その1988年までの間に世に出た東亜同文書院、同文会関係の刊行物は363点です。それに対して88年の同文会誌発刊以降2004年までには68点の本が出ています。第二次大戦後、1945年以降に限定しますと、終戦から同文会誌以前に刊行されたものは83点、これは論文、あるいは評論等も含みます。それに対して同文会誌は68点とその比率から言えば非常に高いと言えると思います。

この20年の間に同文会あるいは東亜同文書院に対する研究は確実に増えているといいと思います。しかも同文書院評価というのは、戦後長く続いてきたマイナス評価というものではなくて、きちんと資料を見てプラスとマイナス両方を